

「底が突き抜けた」時代の歩き方 273

初めて海を前にしたときに発する言葉を生きつづけること

－ 映画『夜になるまえに』

ヒトラーが組織的虐殺を指導したのは、600万人のユダヤ人に対してだけではない。他に政治犯、精神障害者、カトリックの政治犯、ジプシー、同性愛者など600万人をも対象としており、1200万人もの数が推計されている。ここから、ナチス・ドイツがユダヤ人のみならず、精神や身体にハンデを負った者、反対者たちを、体制にとって役に立たない者、弱い者として「処理」していったことが窺える。この「処理」の基軸は、「異端」の発想で切り取ることができるように思われる。すなわち、まず民族的異端者であり、続いて政治的異端者、精神的異端者、宗教的異端者、身体的異端者、そして同性愛者はさしずめ生物的異端者とみなされるかもしれない。もちろん、これらの異端者は劣等者の別名にすぎない。

映画『耳に残るは君の歌声』の中で、主人公のユダヤ人女性の恋人としてジプシーの青年が登場し、彼女と別れてナチスが侵攻したパリに「家族」と共に残る彼が、その後どのような運命を辿ることになるかは想像するまでもなかったが、ここで少しジプシーに触れておきたい。10世紀頃インドのラジャスタン地方を出発して、15世紀に辿り着いた彼らのことを、ヨーロッパの人々はエジプトにルーツのある民族だと思い込み、エジプト人（Egyptian）を語源にジプシー（Gypsy）と呼ぶようになった。だがこのジプシーという呼称は、ほとんどの場合、放浪する人々を指す蔑称として使われてきたので、その反省からジプシーという呼称をやめて「ロマ」と呼び、人権に配慮しようとする運動が起こった。しかし最近では、すでに広く使われているジプシーという呼称を使い、そこに前向きな意味を見出そうとする流れも出ている。

「ロマ」とは伝統、慣習、歴史に裏打ちされた独自の文化を示唆する言葉であるが、ロマニを言語とする彼らは、フランスのジプシーはツィガーヌ、東欧系のジプシーはロマ、スペイン系のジプシーはジタンと呼ばれている。東欧、トルコ、ギリシャ、スペイン、フランスなどで大半が定住生活を営んでいるが、ルーマニアなどのごく一部の地域ではまだ移動しながら生活を送っている。多くのジプシーが自分たちを「流浪の民」だと意識しているのは、移動の過程で激しく迫害されてきた民族の歴史が記憶のなかに染み込

んでいるからだとされる。100%ジプシーの映画『ベンゴ』を撮った、ロマ民族の母親を持つトニー・ガトリフ監督は『アエラ』(01・7・9)で、「この10年間にジプシーの文化は失われてきている。鍛冶屋とか馬関係の仕事とか熊使いとか、伝統的な技能が残っているのは、ブルガリアとアルバニアぐらいかもしれない。しかし、歌や演奏は、昔ながらの生活そのものだ。音楽はいまも各地で息づいている」と語る。

さて、全体主義体制が自国内の多数民族を優等視して、ユダヤ人やジプシー等の他の少数民族を劣等視して差別する傾向が顕著であるとしても、ゲイまでが迫害されねばならないのはどうしてだろう。キリスト教のカトリックもゲイの存在自体を認めていないが、やはり正統主義者にとってはゲイは単なる異端ではなく、生命の価値^{びん} 紊乱者として社会的に抹殺しなくてはならない存在なのであろう。つまり、世の中に間違っ^{びん}て生まれてきた存在であるが故に、社会で芽を早く摘む必要があるとされているのだ。まるで一本の変わった草木の芽をむしり取るように。全体主義国家が優等 - 劣等の差別化を国内において徹底するのは、指導部の独裁性の基礎そのものがその差別化の厳格な階層序列によって成り立っているからだ。つまり、国内全体がそれぞれの部署において優等意識を発揮しう^{びん}る構造に貫かれていることで、全体主義体制が維持されているのである。スターリン体制は無数の小スターリンを生みだし、彼らによって支えられていたように、ナチス・ドイツも無数の小ヒトラーを生みだし、彼らによって支えられていたのだ。

全体主義体制はまた、芸術家に対しても殊のほか厳しかった。革命後の現実^いに絶望して自殺したソ連の若き詩人エセーニンや、収容所群島でお馴染みの作家ソルジェニーツィン、亡命したチェロ奏者・指揮者のロストロポーヴィチ、バレエダンサーのバリシニコフなど、自殺、収容所、亡命にかかわったソ連の芸術家は枚挙に^{いとま} 遑^{いとま}がないほどであり、当然針の穴を穿つような厳しい検閲によって膨大な量の映画作品が上映禁止になった。ナチス・ドイツの場合は、1937年7月、ミュンヘンでナチスが有害とした芸術作品を集めて開催した「頹廢芸術展」が有名である。ダダイズム、抽象派など、ナチスが異質で不健全、ユダヤ的、ポリシェヴィキ的とみなし、敵視した現代芸術家達の絵画、彫刻が多数展示され、展示会終了後、「退廢芸術家」の烙印を押されたパウル・クレー、オスカー・ココシュカらの作品は、安く売り飛ばされるか、屑同然に焼き払われてしまった。また、彼ら自身も創作活動を禁じられ、収入を断たれて国外への亡命を余儀無くされたが、ミュンヘンを皮切りにドイツ各地を巡回したこの展示会はみせしめとして開催されたにもかかわらず、皮肉なことにナチスの予想を裏切って、同時開催されたナチス芸術を讃えるお勧めの大ドイツ美術展の5倍もの観客を集めるほどの盛況ぶりだった。

おそらく現代芸術の「わけのわからなさ」をナチスは忌み嫌い、「退廢芸術」の烙印

を押したにちがいないが、ここから全体主義が自分たちの視野に捉えられない「わけのわからなさ」に恐怖心を抱いていたことがわかる。更に、その「わけのわからなさ」にユダヤ的とかポリシェヴィキ的とか、ありとあらゆるレッテルを貼って排除していく手口も見えてくる。全体主義国家の中でどこからも指弾を受けずに、健全に過ごすためには、一定の曇りもなく透き通った、何の包み隠しもないガラス細工のような思考と精神で日々を営むことが不可欠だった。つまり、バカになる必要があった。人間という存在はいうまでもなく、自分自身にも理解できない「わけのわからなさ」を奥深くかかえこんでいる生命体である。いわば自分の中の「わけのわからなさ」と付き合いながら生きていく存在なのだ。私の考えでは、自由は自分の「わけのわからなさ」の中に無限に埋蔵しているが、全体主義が人々の「わけのわからなさ」を恐れるのは、独裁者たち自身の内なる「わけのわからなさ」に恐怖しつづける姿を映しだしているといえる。

全体主義体制の中でもし「わけのわからない」作家であることと、「わけのわからない」ゲイであることが折り重なった存在として出現するなら、彼はその体制の中でどのようにして生きていくことができるのだろう。だが、これはけっして稀なケースではない。芸術家にゲイが多いことはよく知られているからだ。自身、80年代のニューヨーク・アートシーンを席卷したニュー・ペインティング、抽象表現主義の画家であり、映画『バスビア』を撮ったジュリアン・シュナーベル監督の『夜になるまえに』は、キューバの亡命作家レイナルド・アレナスの生涯を描いた作品である。

1943年に生まれたアレナス（ハヴィエル・パルデム）は、14歳でカストロ率いる暴動に参加。バティスタ政権を打倒した59年1月1日、革命の勝利とともに、2月16日、カストロ政権の発足。アレナスは農業会計士になる学校に入り、新政権の若者を教育するという野心的なプログラムに参加。62年までハバナ大学に通い、社会革命と平行して性革命も起きる中で、恋人を見つける。革命の初期の頃、彼は作家でホモセクシュアルな自分のアイデンティティを模索し、喜びに燃えながらどちらも熱く追求していた。キューバの有名な作家たちとも親交を結び、20歳で処女作『夜明け前のセレスティーノ』を書き、キューバ作家芸術家連盟の小説コンクールで選外佳作に輝く。この作品は、彼が母国で出版した唯一の著書になった。

60年代後半になると、キューバ政府は芸術家や同性愛者たちを弾圧し始め、作家たちは自分の作品を破棄し、同性愛者は一斉検挙されて収容所へ送られ、残酷な待遇を受ける。しかし、アレナスは危険も顧みず自分のタブーな世界を描き続け、二作目の小説『めくるめく世界』はキューバからこっそり持ち出され、フランスで出版されメディシス賞を受賞、彼の名は一躍世界に知れ渡る。一方、カストロ政権への反逆子として、政

府や警察から家宅捜査、作品の没収、友人への脅迫等の容赦ない迫害を受ける日々が続いた。73年、無実の暴行罪で訴えられた彼は逮捕されるが、脱獄し逃亡を試みる。それも失敗して再び逮捕され、悪評高いモーロ刑務所に送られて、殺人犯やレイプ犯の受刑者とともに2年間服役する。獄中、妻や恋人たちへの受刑者の手紙を代筆し、それを理由に自分自身の執筆に必要な紙と鉛筆を確保して生き延びる。だが、自分の作品をこっそり刑務所から持ち出そうとした企てが発覚して、ひどい仕打ちを受け、生命の危険に晒された彼は、やむなく作品の破棄にまで追い込まれる。

出所した彼は、生涯を通じて大親友となるラサロ（オリヴィエ・マルティネス）と出会う。80年、カストロは同性愛者、精神病患者、犯罪者の出国を許可したので、アレナスもニューヨークに亡命する。金も国籍も失った生活の中で彼の人生と執筆へのどんな欲さは激しく、エイズの感染、発病後も、反カストロ運動を展開する一方で、数多くの短編、詩、エッセイ、戯曲を書き続けた。しかし、90年12月7日、鎮痛剤の多量摂取により自殺。回想記『夜になるまえに』が93年に英語で出版され、ニューヨーク・タイムズ・ブックレビューより年間最優秀図書に選ばれる。

88年にアレナスはホルヘ・カマチョとともに、カストロ政権の存続についての国民投票を求めるカストロ宛の次の手紙を世界に公開した。

キューバ共和国元首

フィデル・カストロ・ルス殿

1989年の1月1日であなたが政権を担当して30年になりますが、この間、今日現在にいたるまで、あなたが共和国元首・国家評議会議長・閣僚評議会議長・国軍最高司令官の職務に就きつづけるのをキューバ国民が望んでいるのかどうか、それを明らかにするための選挙は行なわれていません。

15年の独裁政治の後、国民が自国の政治的将来に対して自由に意見を表明することのできたチリにならい、わたしたちは、あなたが引き続き権力の座にいることに「賛成」か「反対」か、それを国民が自由な無記名投票によって決定しうる国民投票がキューバで行なわれるよう本状をもって要請します。

その国民投票が公平に実施されるためには、以下の点が実現されることが必要不可欠です。

1．亡命者たちがキューバにもどることができ、そして他の反対勢力とともに、あら

ゆるメディア（新聞・ラジオ・ＴＶ等）を通してキャンペーンをすることが許されること。

- ２．すべての政治犯が釈放され、国民が自由に意見を述べることを阻んでいる法律が一時停止されること。
- ３．キューバにおける人権委員会が合法化されること。
- ４．国民投票を監督する中立の国際委員会が創設されること。

「反対」が勝利をおさめた場合、議長閣下、あなたは民主的な開放プロセスに道を譲り、キューバ国民がみずからの政権担当者たちを自由に選びうるよう、できうるかぎりすみやかに、選挙の公示をしなければなりません。

この公開状は８８年１２月２７日にヨーロッパ、ラテンアメリカ、アメリカの新聞紙上に掲載され、その署名者には８人のノーベル賞受賞者を含む１６３名の著名な作家・芸術家・政治家たちが名を連ねた。映画人にはフェリーニ、ルイ・マル、デヴィッド・リンチ、バーベット・シュローダー、ベルトラン・タヴェルニエ、ネストル・アルメンドロス、エクトル・バベンコ、イヴ・モンタン、ジャック・ニコルソン、ジェラルド・バルデュー、イザベラ・ロッセリーニらがいる。その数週間後、アメリカの上院議員２８名による同様の手紙がカストロ宛に送られ、続いて議会の４７名からも同様の打診があった。しかし、予測されたようにカストロは、この国民投票への要求を無視した。

２０世紀の全体主義国家は、ソ連・東欧圏やナチス・ドイツだけではなかった。ラテンアメリカも亡命の時代の立役者だった。スペインの支配に対して戦った人々がすでに亡命者であったし、スペインの支配からの独立後に、多くの国で生まれた独裁政権の下での亡命者は数限り無かった。だいいちバティスタ政権の下では、弁護士として政治犯や貧しい人々のために活動していたカストロ自身が、グランマ号でキューバに乗り込む前は亡命者であった。キューバのゲイ弾圧を描いたキューバ映画『莓とチョコレート』は、主人公のゲイがアメリカに亡命するところで終わったが、この映画ではアレナスはアメリカに亡命後自殺してしまう。牢獄の中のアレナスの書きつづけることに対する執念をみていると、映画『クイルズ』で描かれたサド侯爵を思わず想起してしまう。また、牢獄での厳しい弾圧に官能を感じ取っていたサド侯爵同様、アレナスもそこに官能を感じ取っていたのが窺われる。

２００２年１月１４日記

